

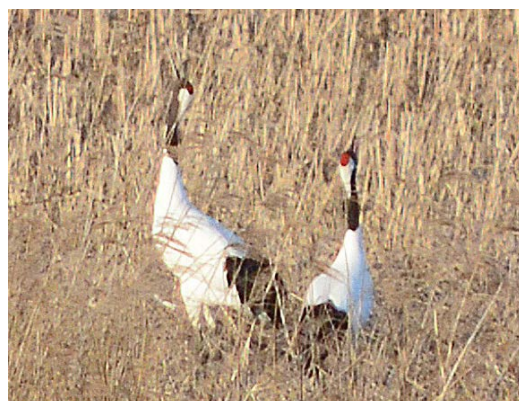


タンチョウ博士のお話 (第29回)

ねんねんさいさい 〇年年歳歳

表題の「年年歳歳」の後には、「花相似」と続きます。これは7世紀の唐の詩人劉希夷の有名な詩の一節で、読み下しでは「ねんねんさいさい、はなあいにたり」と読み、「毎年毎年、花は同じように咲く」と訳されます。なんでこんな漢詩を、と思われたかも知れません。実は、“今年も”舞鶴遊水地で、これまでと同じ番いと思われるタンチョウが、無事2個の卵を産みました。オスとメスが抱卵交代のとき行う鳴き合いを聞きながら(右の写真)、ふと表題の言葉が頭に浮かんだのです。

昨年の広報10月号で、2年続けて子育てに成功するのは、個体の2割ほどとお伝えしました。では、3年続けて子育てに成功するのはどれほどいるでしょう。得られた資料を100羽とすると、今のところそのうちのわずか6羽(6%)ほどにすぎません。この文を書いているのは5月初めなので、“今年も”遊水地でヒナが生まれるのかまだ分かりません。しかし、この広報紙が皆さんへ配られる6月初めには、結果も出ていることでしょう。



《抱卵交代鳴き合いの様子》

4月中旬、舞鶴遊水地の少し盛り上がった巣上で卵を抱いていたオス(左)が立ちあがり、寄ってきたメス(右)と天を仰ぎ、大声で“コー・カッカ”と繰り返し鳴き合う姿

たしかに、寿命が一般に長い樹木、たとえば冒頭の詩にも詠まれている中国の春の代表的な花木のモモとスモモは、毎年同じように花を咲かせます。それゆえ、平均寿命が40年ほどと言われる当時のヒトにとって、変わらないことの象徴として、詩人もたとえに用いたのでしょう。ただし、モモの実際の寿命は30年か、長くても60年ほどで、スモモはもっと短いようです。

したがって、多年生植物と言われても、たとえそれが屋久島の千年杉であろうと、個体として不変のものはありません。動物も植物も、生きものは時間とともに変化し、やがて死を迎えます。それが個体の集まりで起きると、時に大きな環境変化をもたらします。

舞鶴遊水地が造られた当初は、開けた水路がたくさんあり、季節によりガン・カモ・ハクチョウ類などで大にぎわいでしたが、今は草が生い茂り、ひっそりとした、たたずまいです。これが遷移と言われる現象で、こうした変化にタンチョウは今後どう対応するのか、しっかりと見守ることが必要です。

さて、「年年歳歳花相似」には対句として、「歳歳年年人不同(花を眺めるヒトは毎年変わっていく)」が続きます。「人不同」には、顔ぶれが変わる、眺めるヒトの境遇が変わる、という2つの解釈がありますが、私は後者を探ります。したがって、今のところタンチョウの平均寿命は“千年の100分の1.5年”くらいですから、ヒトよりも「歳歳年年ツル同じからず」と言えそうです。

なお蛇足を1つ。上の有名な詩の題目は「代悲白頭翁」で、白髪になった身を嘆く老人に代わり、その気持ちを詠じた詩です。そして、歳歳年年の句のすぐあとに、「応憐半死白頭翁(まさにあわれむべし、死にかけている白髪の老人)」とあり、まさしくこれが今の私にぴったりの表現なのです。(文・撮影：正富宏之)

【問合先】役場企画政策係 (☎76-8015)